

# 櫛葉や富岡など各地で防災訓練

東京電力福島第二原発が立地する櫛葉町、富岡町をはじめ、大熊町の県原子力災害対策センター(オフサイトセンター)など各地で二十八日実施した県原子力防災訓練で、参加者は被ばく医療、避難誘導や情報伝達などを確認し、万一の原子力災害に備えた。県をはじめ、双葉郡内の櫛葉、富岡、大熊、双葉、広野、浪江八町が主催し、二百四十機関・団体計千二百人が参加した。福島第一原発1号機の主蒸気系トラブルを想定。原子力災害特別措置法第十条に基づき、県と原発立地四町はそれぞれ災害対策本部を設置し、国や防災関係機関の協力を得て訓練を展開した。

## 住民ら避難訓練

体表面汚染  
モニタ体験



スクリーニングを実施



避難する住民ら



安定ヨウ素剤の説明を受ける川手晃副知事

○放射線などの影響が発電所敷地外に及ぶ恐れが生じたとして実施した住民の屋内待避・避難訓練には、第二原発1号機から一・五キロ以内の櫛葉町の波倉地区、富岡町の毛貫地区などの住民約九十人が参加した。このうち、櫛葉町の救護所が設けられた町保健福祉会館では、初期被ばく医療活動を実施。住民は、検査活動を使った「体表面汚染モニタ」を体験。放射性物質についてあらためて意識し、やや不安げな表情を見せる女性もいた。

防災説明会では、住民に放射線や原子力防災について解説。甲状腺がん発生を誘引する放射性ヨウ素の予防として、安定ヨウ素剤の役割を紹介した。参加した大和田一郎さん(八八)は「こうした訓練は事前の予告なしにやった方が万一の

「こうした訓練は事前の予告なしにやった方が万一の

ときに役立つのではないか」と話していた。

情報共有化図る  
オフサイトセンター

○大熊町のオフサイトセンターには、現地災害対策本部が設置された。各関係機関の代表者がテ



情報共有化を図った対策会議

# 原子力災害に備える



負傷者の応急処置と被ばく線量を測定する医師

## 汚染負傷者の医療処置

○大熊町の県環境医学研究所検査除染室では、原子炉建屋内で起きた汚染負傷者に対する医療処置や被ばく線量測定などが行われた。

発電所から搬送された負傷者を受け入れた後、県立大野病院の担当医師が、ただちに表面汚染状況や二次被ばくの可能性の有無を線量計で測定。除染処置を施した。県立大野病院に搬送する訓練も併せて行われた。

医師らと放射線管理員連携 福島震災

○被ばく者の治療が行われたいわき市の福島労災病院では、医師や放射線技師、看護師ら応急処置チームと東電の放射線管理員が連携しながら、緊張感ある訓練を展開した。放射性物質が傷口に付着した患者が搬送されると、医師らが除染、治療を行うたびに、管理員が汚染測定を行った。また、被ばく者に触れた医師や管理区域に指定された

同病院は東電と「放射性物質による汚染を伴う傷病者の診療に関する覚書」を締結している。万一の際には応急処置のほか、「心のケア」チームを結成し、被ばく者本人や家族、事業所に対応する、という。

た空間も入念に確認。放射性物質の拡散を防ぐには一つのミスも許されないことから、参加者は真剣に取り組んだ。

富岡、広野、大熊の地元四町を結び、情報の共有化に努め、迅速な意思疎通の決定を図った。また、対策会議などの結果を知らせる報道機関への情報提供訓練も行われた。